

「<sup>わたし</sup>私」的出会い論

- 木村敏の〈あいだ〉 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
高野 容子

生命を得てより「私」となるまで、人には、人や物との時々刻々の出会いがある。そして、その出会いは科学だけでは量り知れない。何故ならその出会いは、生物である人の「生命一般の根拠とつながりを維持している」という行為・行動であり、そこに「感覚・作用(働き)」をしているのが〈あいだ〉であり、人はそこで「新しい原理」・「新しい主体」を得ているからである。

人である「私」が出会いにおいて「新しい原理」・「新しい主体」を得るには、他者(物)との出会いがある。そこで〈あいだ〉は、出会いの「無限のおのずから」を「みずからの中にすくい取って」、「新しい原理」・「新しい主体」という変化を「私」の「もの」としていく。これは、〈あいだ〉が、「私」の主体として、他者(物)を「見ながら感じながら」の「感覚・作用(働き)」をしている。言い換えれば、これが人間関係における「間」である。それは、「私」の時々刻々の出会いが「生命一般の根拠とつながりを維持している」現在の出会いであり、その出会いがあって始めて「もの」として意識できる過去があることによる。人は、この「新しい原理」・「新しい主体」を「私」の「もの」にする変化をもって、その「もの」から未来に向かって生きているのである。

人は言葉を持つ。前述の「もの」は、「私」の中で一つの言葉になっている。その言葉自体は「もの」でありながら、述語的コト(事)でもある。そして、言葉は、そのコト(事)の全てを表現できないことによる「正常なずれ」をもつ。出会いにおいて、「私」の主体である〈あいだ〉が「感覚・作用(働き)」をするには、「私」の主体の過去の「もの」になったコト(事)の数々があることによる。そのコト(事)の数々は、これまでの出会いで積まれていく。そして、言葉の「正常なずれ」は、人が生きる共同体にある共有された対応をとることによって、そのつど修正され、「私」の「新しい原理」・「新しい主体」となっていく。そしてこれを、社会行動や生活において「自然なこととして自己に統合」することを、人は行っている。

私が人や物と出会うとき、また、精神科看護師として患者と出会うときも、出会いは、私が「私」に出会うことである。何故なら、患者の言葉にある言い尽くせないコト(事)に出会うことで、その患者にとって「自然なこととして自己に統合」されていないこと、患者の「私」が「新しい原理」を得ていないことを知るからである。あるいは、患者同士の関係と破局の出会いでは、その奥に潜む「安心」がキーワードとなる他者の存在を知るからである。そこで私は、患者を通して「私」の「新しい原理」・「新しい主体」を得るが、患者はどうであろうか。私との出会いで、患者の得ている「新しい原理」・「新しい主体」が、「自然なこととして自己に統合」されるには、「安心」をキーワードとする出会いの「関係あるいは存在」の解明が待たれている。